

出会いふれあい そして挑戦



トライアスロン中島大会
実行委員長
俊成 雅直

●はじめに

昭和61年7月6日、四国で初めてのトライアスロン大会として、中島大会が開催された。多くの課題を乗り越えながらも、地域おこしへの思いが集約されている。これまで、多くの方々の支えで、続けられたことにまず感謝をしたい。今では、「トライアスロンの島、中島」というイメージが定着し、トライアスロン専門誌の「出場してよかった国内大会ベストテン」の常連に、ランク入りする評価をいただいていることは、このうえもない喜びである。

中島大会については、近年、「舞たうん第86号」や「平成19年度えひめ地域学調査報告書」で紹介いただいているので、最小限にとどめた形で紹介をしてみたい。

●中島大会の特徴

なんとといっても地域をあげて、800人のボランティアにより、心を込めた受け入れ体制でお迎えしていることだ。ほかの大会にはない、正真正銘の手作りの大会だと自負している。

●第7回大会、中止の危機

それと、前日から現地宿泊や前夜祭出席が、参加要件の一つになっていることである。選手は、旅館、民宿、公的施設などに宿泊していただくが、3回大会から、ホームステイの形で受け入れるようになった。前夜祭は、1回大会から実施。各地から集った皆さんの親睦や地元との交流を深めており、選手たちには好評である。



前夜祭会場



前夜祭会場裏方

話はちよつと変わるが、中島町が発行していた平成3年11月号と12月号の「広報なかじま」は発行されていない。これは、平成3年9月27日夜、台風19号によって

中島地域は甚大な被害を受け、広報誌の発行どころではなかったからである。蜜柑の木は枯れ、道路は寸断され、生活を立て直すことが町としての大命題となった。その後、このことで、第7回大会の開催が懸念されたのである。

台風襲来の一ヶ月後、南宇和郡の一本松町から松山までの160kmを、中島大会参加者の有志が、「台風19号災害救援チャリティーマラソン」を企画し、住民に支援を訴えながら走った。ゴールした鉄人たちは、「私たちの、中島を思う気持ちを受け取ってください」と、メッセージとともに義援金を届けてくれた。

「この思いを無にしていけない」と、いうこともあり、平成4年の第7回大会は、全国各地からの物心両面による応援を受けて、実施に漕ぎつけた感無量の大会となった。



広報なかじま臨時増刊号
(平成4年1月1日発行)



第1回
トライアスロン中島大会
パンフレット

● 変革の10回大会

10回大会から、各部（水泳部、ランニング部、自転車部、医療部、宿泊部など）の長を、民間の方々にも就いてもらい、実行委員長も民間からの起用とした。それと、子どもたちに参加をってもらう「ジュニアアクアスロン」を始めた。水泳150m、ランニング2kmとし、大人の大会の前にスタートした。これは、子どもたちに、将来のアスリートとして参加をという思いが一つ。もう一つは、中島町には有人島が6島あるが、大会の開催される中島以外の島の皆さんの関わりが少なかったので、子供たちが参加をすれば大人たちが出向いてくれて、より以上に関わってくれるのではと考えたのである。

● これから

毎年、事務局を悩ますほど参加者数は増えている。定員をはるかに超えてうれしい悲鳴の一方、100人以上を断らなければならず、応募者全員を受け入れたという思いはあるものの、宿泊や安全面のことを考えると躊躇してしまう。かつては、宿泊施設もたくさんあり、選手を受け入れには余裕があったが、多くの過



ジュニアアクアスロン



トライアスロン中島大会 水泳

疎地域で共通する高齢化や後継者不足の問題が大きな影を落としている。

参加選手の意見には、「中島大会は、トライアスロン競技が日本に入ってきた当時の雰囲気が残っている。前夜祭もその一つ、「出場希望者が増えているのは、地元への応援の素晴らしさや出場条件に協会への登録や団体への加入といった縛りがなく、個人でのエントリーがしやすい」、「中島コースは平坦部が多く、やっぱり沿道の皆さんの応援が嬉しい」などがある。

こうしてみると、全国的に瀬戸内海の中島をメジャーにした効果は大きい。毎年、準備や片づけで大変だが、選手たちがゴールインする姿を見ると、「また、来年も」という気持ちになる。その繰り返しで今までできたが、これからも続けていきたいと考えている。

今年の8月、25回目の号砲が鳴り響く。